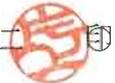


論文審査の要旨	
学位申請者 氏名	はま だ さち よ 濱 田 幸 代
論文題目	1～3歳児の描画発達に関する研究
論文審査担当者名	主査 教授 堂野恵子  審査委員 教授 片上宗二  審査委員 教授 船津守久  審査委員 広島大学名誉教授・岡山商科大学教授 前田健一 
論文の要旨	
<p>幼児期、特に1～3歳児の描画発達は著しく、心理的発達に与える影響は大きいと考えられる。しかしながら、発達心理学的視点に立脚した描画発達の研究は少なく、ましてその実践的研究は未開拓分野といえる。保育実践の観点からは、描画発達の基本枠組みとしての「線描の発達過程」とその「要因」について、従来の研究ではあまり焦点が当てられてこなかった実証的研究を行い、指導・援助のあり方についての示唆を導くことが必要と考えられる。これが本研究の動機、目的（第Ⅰ部）であった。</p> <p>第Ⅱ部では、（1）研究の出発点として必要な線描の一般的発達過程についての明確化の観点から、諸外国（第2章）及び本邦（第3章）の代表的な先行研究について紹介・考察が行われ、これに基づいた線描発達に関する「3段階区分」モデルがまとめられた（第4章）。これは、Kellogg(1969)の考えを基軸とし、その詳細な現象報告的記述を「発達段階」の概念を用いてまとめ直し、さらに描画発達の基盤である描画対象への「イメージ機能」の発達の観点、特にその「分岐点的な変化」に着目して構築されたものである。次に、（2）同じく代表的先行研究の紹介・考察（第2章・第3章）をふまえて、第Ⅲ部で検討すべき幼児の描画発達の重要な「要因」についても指摘された（第4章）。</p> <p>第Ⅲ部では、上記（1）・（2）をふまえて、「3段階区分」モデルによる線描の発達と「発達要因」との関連や効果性を検討した4つの実証的研究が報告された。まず第5章では、要因として認知発達面、特に「言語発達」に注目し、線描形態の発達と線描対象に対する「命名」の変化との関連が確認された。第6章では、認知発達面の「イメージ発達」に注目し、その拡大を援助する指導法の視点から、「課題画」を年少児にも導入することの効果が検討された。その結果、2歳後半～3歳前半児になると課題画、特に「遊び」を取り入れた課題画の効果が確認された。第7章では、イメージの拡大を助ける遊びとし</p>	

での「構成遊び」に注目し、線描の発達との関連が検討された。その結果、構成遊びの先行性が見出され、構成遊びへの取り組みが描画発達に与える効果性が示唆された。第8章では、要因として「社会性・情緒面」に注目し、特に描画時の「他者とのかかわり」が取り上げられ、保育者の積極的なかかわりが有効であることが実証された。

第IV部は総合的考察として、まず本研究の総括が行われ、さらに問題点と今後の検討課題の指摘、及び本研究から浮上する保育士の資質向上について論考された。

論文審査の要旨

本研究は、描画発達の基盤形成期である1～3歳児に対する描画の指導・援助という保育実践において、描画に関する発達心理学的な理論・研究のより効果的な活用が必要であるとの動機・問題意識（第I部）に基づいて行われた。これは学位申請者の保育士としての長年の実践経験に裏打ちされており、研究の意義は評価できる。

こうした問題意識に基づき具体的に研究を進展させる観点から、2つの問題・目的が設定された。その第一は、希少であっても先行研究を通して、1～3歳児の普遍的な描画の「発達過程・発達段階」についての明確化を図ることであった。第II部では、主要な基礎的・代表的先行研究についての検討を行い、従来の研究では十分な整理・構造化にまでは至っていないこの時期の描画発達の過程について、新たに「3段階区分」モデルの提案を行っている。「イメージ機能」の「分岐点的な変化」に着目して構築されたこのモデルでは、具体的には、イメージ機能の働きがまだ乏しい「うねうね線」や「うずまき線」を中心とする第1段階、次にイメージ機能が芽生え始め、さらに進展する「単交円」の出現から「円」の出現までの第2段階、イメージ機能が明確化する「人の顔」や「ぬりつぶし」の出現、及び「頭足人」の出現までの第3段階、という3つの発達区分が想定されている。今回特に注目された第2段階の「単交円」については、その出現後、一語文の事後命名が生じるという結果が見出されたことから（第5章）、単交円はイメージ性の乏しい「純粋ななぐり描き」が展開する時期ではなく、イメージ機能の芽生えがみられるという意味で「後期なぐり描き期」、またはいくつかの基本の形（円、四角など）の描画が出現する「初期図式期」への「移行期」、といえるのではないかと考察している。従来、このような視点から「単交円」に焦点化し、その重要性に注目した研究は皆無といってよい。この例からも示唆されるように、1～3歳児の描画の発達過程に関して、従来、イメージ機能の発達の観点からの「分岐点的変化」や「移行期」の存在に十分な注意が払われていたとは考えられない。こうした背景に対し、本研究においては、この面を重視する発達過程モデルの提案を行ったともいえるものである。研究の特異性・独自性の点からみても、理論研究として一定の評価ができる。

第二の問題・目的として、理論研究の保育実践への活用の観点から、1～3歳児の描画の発達に影響する諸種の「要因」についての検討が必要であることが指摘された。第III部では、これを目的とする上記の3段階区分モデルによる発達過程とその発達要因に関する4つの実証的研究が報告されている。「実証的」研究に取り組んだ背景には、第II部の代

表的先行研究の多くがデータの明示されない総括的発達論であったり、また少数の近親者に関する事例的研究であったりすること、さらにその後の研究も大半は美術領域または保育・教育領域からのアプローチであり、発達心理学的方法論に立脚しての実証的研究が少ないといった認識が存在した。第Ⅲ部の4つの研究内容に関しては、実証的検討はこれまでほとんど行われていないものであった。得られた結果は、概ね1～3歳児の描画発達に果たす各要因の効果を確かめるものであった。このように実証的方法論に基づく新しい知見の提供ができたという意味でも、本研究は十分に評価できる。

これらの要因の効果性に関する結果をふまえて指摘した指導・援助の手だては、現実の保育場面で保育士が実践を試みる場合、容易に取り組んでその質的・量的拡大を十分に図ることができるものであった。この意味で、保育実践の観点からみても本研究のもつ意義は大きいといえる。さらに筆者は最終章の総合的考察で、第Ⅲ部の結果からみえてくる1～3歳児の描画の発達過程、及び発達の要因をふまえて、「保育園での主要な指導・援助（手だて）」モデルを新たに提案している。ここでは、3段階区分モデルの3つの発達段階に、さらに描画発達の基盤形成期として重要な2つの前段階を付け加えて、指導・援助（手だて）のポイントが具体的に示されている。このように、本研究は実証的な発達心理学的理論研究を主目的とするものであったが、単なる理論研究に終わるのではなく、保育実践のための基礎研究としての意味も大きいといえる。この点は、本研究の動機づけともなった根本的な目的とも絡めてみる時、大きく評価できる。

本研究はこの分野における新しい視点に基づくものではあるが、まだ緒についたばかりでもある。総合的考察において、今後の研究課題の一つとして、新たに提案した「保育園での主要な指導・援助（手だて）」モデルの妥当性についての検討を上げている。例えばアクションリサーチ的研究法の導入により、発達・保育心理学的な実証的な検討を行う必要性が指摘される。また第6章において、「遊び体験」を取り入れた「課題画」方式の効果が、2歳後半～3歳前半児で確かめられたにもかかわらず、2歳前半児では未確認であった点も課題である。保育実践の上では、この方式の有効性が2歳前半児にまで包括されるのであれば大きな意味がある。この点も今後の研究課題の一つである。さらに、基本的先行文献の精査は行っているものの、十分なものであったかという点にも検討の余地が残る。この背景には、この分野の理論的、特にデータに基づいて実証的に検討した先行研究自体が希少であるという現状も指摘できる。

以上、本論文は、1～3歳児の描画発達について実証的な発達心理学的理論研究を目的とし、従来の研究を発展させて新たな知見を得ている。また、いわゆる理論研究に終始するのではなく、保育実践のための基礎研究としての意味と貢献は特に大きいといえる。こうした諸点を勘案すると、本研究の独自性及び研究の意義は十分に評価できる。また今後の研究の発展と成果も期待できる。本論文は博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断できる。